

岡山大学の^{人々}3

3回目は、フロイト研究のほか、能・狂言にも造詣の深い社会文化科学研究科・金関猛教授です。



金関 猛 (かなせき たけし)
昭和29年京都生まれ。
昭和56年京都大学大学院文学研究科修士課程(ドイツ語・ドイツ文学専攻)修了
同年4月から本学勤務
現在、社会文化科学研究科教授、文学部副学部長

今 年10月1日に創立五十周年記念館で文学部30周年記念事業として行われる狂言公演、「狂言を観に行こう」。この公演を企画したのが、今回ご紹介する金関猛先生です。先生の専門はオーストリアの精神分析学者フロイトの研究ですが、能・狂言に造詣が深く、「岡山の能・狂言」(日本文教出版)という著書も出されています。

能 との出会い、学生時代。その音楽の激しさに驚きました。雅やかというより、力強い拍子があつて、当時、ロック・ミュージックを浴びるように聞いていたので、違和感なく受け入れられ、惹きつけられました。「そこからどんどん」「ハマって」いったそうです。

能の魅力は「わけのわからない」にあると語られます。「能はストーリーらしいストーリーがありません。セリフも誰が発しているのかわからない構成になっています。論理的に作られていな

いので、正直、わけがわからない。しかし、そのわけのわからないから人間の心の奥底にあるとらえどころのないもの、それが伝わってきます。われわれの感覚に訴えかけてくるものがあるのです。そこが面白い。」

専門であるフロイト研究ともリンクします。「能は夢幻能といって夢の中の出来事を題材としたものがほとんど。フロイトは夢を精神分析の重要な要素としています。能もフロイトの手法を用いて読み解くことが可能なのです」。この研究の成果は『能と精神分析』(平凡社)として出版されており、能にはじめて精神分析の観点を導入したことで評価されています。

岡 山に来てからは、自らも能の謡をたしなんでいます。「その関係で岡山の狂言師として知られる田賀谷夙生さんと知り合い、彼が師事していたのが人間国宝の狂言大蔵流・茂山千作さん」。もともと岡山は能・狂言の盛んな土地で、狂言大蔵流と縁が深かったこともあり、狂言大蔵流・茂山千五郎家による本学での狂言公演が実現しました。

「狂言は本来、能の合間に演

岡山大学文学部30周年記念事業 「狂言を観に行こう」

公演内容

「棒しばり」	次郎冠者：茂山 茂 太郎冠者：山下 守之 主 人：田賀谷夙生 後 見：島田 洋海	「濯ぎ川」	婿：茂山千五郎 女：島田 洋海 姑：田賀谷夙生 後見：茂山 茂
--------	---	-------	--

解 説：「岡山と狂言」金関 猛 (岡山大学文学部教授)

【日 時】平成22年10月1日(金)
開場 17:30
開演 18:00
終演予定 20:00

【場 所】岡山大学創立50周年記念館多目的ホール(津島キャンパス)

【対象者】卒業生、在学生、一般の方々のご来場を歓迎します。

【参加費用】無 料

【申込方法】鑑賞をご希望の方はメール、またはハガキで、下記までお申し込みください。先着順で整理番号をお知らせします。狂言鑑賞希望と明記の上、住所氏名をご記入ください。

メールアドレス：bungaku@cc.okayama-u.ac.jp
ハガキ宛先：〒700-8530 岡山市北区津島中3-1-1 岡山大学文学部庶務係

【注意事項】収容人数の関係で入場をお断りすることもありますので、ご了承ください。

じられるものでしたが、徐々にその面白さが認められるようになり、現代では独立して演じられます。能の緊張を解きほぐすことが狂言の役割だったので、能が一般に悲劇的なのに比較して狂言は喜劇的といえます。能よりも親しみやすい芸能です。」

演 目には「棒しばり」と「濯ぎ川」の二本。「棒しばり」はいわゆる『太郎冠者も』の代表作で、腕を縛られた太郎冠者と次郎冠者が酒を飲もうと苦心惨憺する筋立てで、その滑稽な仕草に笑って楽しめます。「濯ぎ川」は中世フランスの笑劇をもとに作られ、昭和27年に初演された新作狂言で、わかりやすいストーリーが特徴で

「狂言は本来、能の合間に演

す」と見所を教えていただきまし

教 養教育科目「日本の伝統芸能」という授業も担当されていますが、学生から「日本人なのに日本文化を知らないのは不安」という感想を聞くことがあるそうです。「日本の伝統芸能で最もとつきやすいのが狂言。この公演をきっかけにして、学生にも日本の伝統文化について知って欲しいと思います。」

公 演では、金関先生による「岡山と狂言」と題した解説も行われます。ぜひ、10月1日は創立五十周年記念館で狂言を鑑賞しましょう。

「狂言は本来、能の合間に演